

## コレラの夏—メルヴィルの原風景

星野 勝利

*Talk not of the bitterness of middle-age and after-life;  
a boy can feel all that, and much more, when upon his  
young soul the mildew has fallen.*

Herman Melville, *Redburn*

*This fabulous shadow only the sea keeps.*

Hart Crane, "At Melville's Tomb"

## 1 はじめに

漱石の『坊っちゃん』は青年教師の物語である。田舎の中学校に赴任した東京育ちの一人の新任教師の体験を語るものである。生意気な生徒たちや社会の縮図のような教員の世界で繰り広げられる青年の行動は、一種のピカレスクである。痛快無比な冒険譚である。しかしこの青年は、着任以来わずか一ヶ月でこの生活にピリオドを打つ。校長に辞表を出し、東京に帰ってしまう。

新しい世界を短期間で後にする青年教師の行動は、物語としては痛快である。しかし、世間一般的な視点で眺めれば、乱暴であり、無謀である。このような行動をとる青年の心のありようは、常人には理解しがたい。しかし、この青年の心の世界で、読者にも明確に感じ取れるものが、少なくとも一つはある。東京の実家に住む下女、清（きよ）への思いである。

田舎に赴任した青年教師が、独り身の生活の中で絶えず思い浮かべるのは、肉親ではない。この下女である。「おやじは些（ちつ）ともおれを可愛がって呉れなかった。母は兄許（ばか）り鼻唄（ひいき）にして居た」という両親は、すでにこの世にはいない。兄とも不仲である。このような環境の中で、青年の心が向かうのは、「後生だから清が死んだら、坊っちゃんの御寺へ埋めてください。お墓の中で坊っちゃんの来るのを楽しみに待っております」という、清である。目一杯の愛情を、さながら実母のように、惜しみなく注いでくれる清である。

『坊っちゃん』の作者漱石が、幼児期に複雑な生い立ちをしたことは、よく知られている。江戸牛込馬場下の名主の家に、五男の末子として生まれた漱石（夏目金之助）は、望まれなくして生まれた子として、生後すぐ、四谷の古道具屋に里子として出される。ところがその里子が、夜中にかごの中で品物と並んで並べ

られて寝ているのを見て、不憫に思った姉が、実家に連れ戻してしまう。連れ戻された漱石は、翌年、再び別の家に養子に出される。しかし今度は、その養父（塩原昌之助）の女性問題に絡む家庭内の不和により、9歳のとき、養子のまま、再度生家に戻ることになる。以後、この生家で暮らすことになるが、実父と養父との間のゴタゴタもあり、戸籍上夏目家に復籍したのは、21歳のときであった。

修善寺の大患を経た最晩年の随想（「硝子戸の中」）で、漱石は、揺籃期、幼児期の自分の身边にかかわる思い出を、淡々と記している。それによると、実家に戻ってしばらくの間、漱石は、自分の両親を祖父母と思い込んでいたという。その祖父母が実の親であることを、ある日さりげなく教えてくれたのは、実家の下女であった。何ともやりきれない思い出である。そのためであろうか、回想としての実の親への思いも複雑である。父に対しては、「過酷に取り扱はれたといふ記憶」（29話）しか残っていないという。ただし、母に関しては、「すべて私に取って夢」ではあるが、「宅中（うちじゅう）で一番自分を可愛がって呉れたものは母だ」という強い親しみの心（38話）があるという。作品『坊っちゃん』で際立つのは、肉親、とりわけ父の存在感の希薄さである。そして、これとは対照的な、清の存在感の大きさである。晩年の回想は、作品『坊っちゃん』の世界が、作者漱石の生い立ちの環境と無関係でないことを示唆している。

メルヴィルの作品『白鯨』（*Moby-Dick*, 1851）は、「わたしをイシュメイルと呼んでほしい」（1章）という、よく知られたことばで始まる。イシュメイル（Ishmael）とは、旧約聖書「創世記」に出てくる青年の名称である。ただし、ただの青年ではない。ノアの洪水の後、人類救済のために神によって選ばれた予言者、アブラハムの息子である。子宝に恵まれなかったアブラハムの妻サラが所有していたエジプト人女奴隷ハガルと、アブラハムの間に生まれた子、いわゆる庶子である。ところが、後に正妻サラに奇跡的に男児が生まれたため、イシュメイルは、母とともに、砂漠に追放される。追放されたイシュメイルは、「野ろばのような人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手は彼に逆らい、彼はすべての兄弟に敵して住む」（16章）ことになる。すなわち、放浪と反抗の孤児イシュメイルとなる。

『白鯨』は、イシュメイルを名乗る人物が語る物語である。捕鯨船の船長と白い鯨の物語であり、ピカレスク的な捕鯨譚である。しかし、仮名の語り手の登場がすでに示唆するように、船長と鯨の物語は、単なる捕鯨譚ではない。象徴性を豊かにはらんだ捕鯨譚である。語り手イシュメイルの存在も例外ではない。捕鯨船での体験のいっさいを語るこの青年は、その途上、自分の生い立ちに関わるようなことばを口にする。このことばには、海に出たこの青年の心の風景が浮かび

出る。私生児として、孤児として、青年イシュメイルは、不在の父、そして亡き母の姿を求める。

Where is the foundling's father hidden? Our souls are like those orphans whose  
unwedded mother die in bearing them: the secret of our paternity lies in their grave,  
and we must there to learn it. (Ch. 114)

このような作品の作者メルヴィルの心の世界は、どのようなものであったのだろうか。漱石の『坊っちゃん』と同じように、揺籃期、幼児期の個人的生い立ちと、関係があるものなのだろうか。作家としての精神構造と、どのように関わるものなのか。

## 2 魂のタヒチ島

『白鯨』の中でイシュメイルは、海の世界の恐怖について語る。それによると、海の恐怖に囲まれた「緑の大地」は、じつは「人間の魂」と同じものである。それは、「人生という半ば理解不能な恐怖」に取り囲まれた「平和と歓喜にあふれた一個のタヒチ島」(58章)である。

「タヒチ島」の世界は、もちろん比喩として語られている。しかし作品冒頭部では、この具体例となるような日常風景の一コマが、シュメイルによって紹介される。ニューヨークのマンハッタン島は、インドの島々が「珊瑚礁」によって囲まれているように、周りを「埠頭」と「通商の波」によって囲まれている(1章)。よく晴れた安息日の午後、この場所に無数の人々が群がる。この人々は、まどろむような平和な午後の大気なかで「海の夢想」に浸る人々である。物語冒頭でイシュメイルが紹介するのは、この平和な風景である。平和と歓喜にあふれたタヒチ島のマンハッタン版である。

メルヴィル (Herman Melville, 1819-91) は、ここで紹介されている埠頭のすぐ近くにあるパール街 (6 Pearl Street) で、1819年8月1日、父アラン (Allan Melville, 1782-1832, Melville への表記変更はアランの死後) と母マリア (Maria Gansevoort, 1791-1872) の8人の子のうちの3番目 (次男) として生まれる。一家はこの後、ほぼ数年間隔で、マンハッタンを北上する形で転居を繰り返す (1820年 55 Courtland Street, 1824年 33 Bleeker Street, 1828年 675 Broadway)。北上する転居は家計の好転と連動するものであったが、メルヴィルはこのなかで、揺籃期を過ごし、幼児期を過ごす。これらの場所はいずれも埠頭の近くにあり、イシュメイルが作品冒頭で紹介した場所は、メルヴィル一家も日頃なじんでいる場所であ

った。この世界でメルヴィルは肉親の愛情に包まれて成長する。

メルヴィルの生い立ちは、漱石のそれとは異なる。フィクションとしての青年教師、坊っちゃんのものとも異なる。肉親の愛情は希薄なものではなかった。たとえば、外国の衣類や装飾品(dry-goods)を扱う貿易商であった父アランは、長兄ガンセヴォート(Gansevoort)と長姉ヘレン (Helen) に続く 3 番目の子であるメルヴィルを、7歳の夏、ハドソン川を 200 キロほど遡ったところのオールバニーにある妻の実家へ送り出す。初めての一人旅である。

このとき、実家を継いでいたのは、妻の兄ピーター (Peter Gansevoort, 1788-1876) である。ピーターとアランは、仕事を通して、すでに旧知の間柄であった。しかも、新婚当初アランは、妻のこの実家にしばらく同居していたこともあり、義兄ピーターは、仕事仲間でもあった。そのピーターに対し、まだ幼い我が子を送り出すアランは、挨拶を込めた手紙を送っている。手紙の中でアランは、世話になる我が子が、ことばの発達がおそく、理解力にやや劣る子であることを率直に認めている。その一方で、母方の実家のオランダ系の血筋を立派に受け継いだ子であり、従順で、素直な、しっかりした子であることも、あわせて伝えている。多少の外交辞令がまじっているとしても、子を送り出す肉親としての、また父親としての愛情は、ことばの端々に滲み出ている。

I now consign to your especial care & patronage, my beloved Son Herman, an honest hearted double rooted Knickerbocker of the true Albany stamp, who I trust will do equal honour in due time to his ancestry [.] parentage & Kindred – he is very backward in speech & somewhat slow in comprehension, but you will find him as far as he understands men & things both solid & profound, & of a docile & aimiable [sic] disposition – if agreeable, he will pass vacation with his Grandmother & yourself, & I hope he may prove a pleasant auxiliary to the Family Circle – I depend much on your kind attention on my dear Boy who will be truly grateful for the least favour....

(Parker 35)

マンハッタンでのメルヴィルの生活は、揺籃期、幼児期を通して、約 10 年間のものである。1830 年、メルヴィル 11 歳のとき、一家は妻の実家のあるオールバニーに転居するからである。この時期、アメリカ東海岸の社会は、激しい変動の渦中にある。ニューヨークも例外ではない。メルヴィルが生まれた当時、ニューヨークの人口は、約 10 万ほどであったという。しかし、生涯を閉じた 1890 年頃には、その人口は優に 300 万を超えている。約 70 年間のうちに、30 倍にも達す

るほどの激しい人口増である。幼いメルヴィルが生きたのは、このような勃興中の町、ニューヨークである。

ニューヨークのほかに、幼いメルヴィルが特になじんだ場所がある。ボストンとオールバニーである。この場所は、メルヴィルにとって、いわば平和と歓喜のタヒチ島の世界であり、加えて誇りの感覚も育ててくれる場所であった。

ボストンは、父アランの実家のあった場所である。父アランは、建国の歴史を誇りとするこの町で、スコットランド系移民の血を引くトマス・メルヴィル (Major Thomas Melvill, 1751-1832) の子として生まれる。11人兄弟の4番目(次男)である。祖父トマス(父の父)は、独立戦争(American War of Independence, 1775-1783)の勇士であり、町の名士であった。祖父の家(10 Green Street)は、ボストンの中心地ビーコンヒル(Beacon Hill)にあったが、何度も訪ねたこの家は、メルヴィルにとっては懐かしい家であった。茶会事件(Boston Tea Party)で勇敢に戦った祖父とともにしたボストン港界限の散策は、楽しい思い出の一つであった。ビーコンヒルではこの頃、丘が削り取られ、その土でチャールズ川の埋め立てが行われていたが、削り取られた土が手押し車(wheelbarrow)で運ばれていく風景は、『白鯨』(99章)の中に取り込まれている。建国の英雄の身近な存在は、子供心にも誇らしいものであったにちがいない。

一方、母マリアのふるさは、オールバニーである。ハドソン川上流のこの町で、母マリアは、父アランと同じく、独立戦争の英雄の子として生まれる。オランダ系移民の血を引くマリアの父(メルヴィルの祖父)、ガンセヴォート將軍 (General Peter Gansevoort, 1749-1812)は、独立戦争の際にスタンウィクス砦(Fort Stanwix)に籠り、侵攻してきたイギリス軍とインディアンの連合軍を撃退した名将であった。この祖父は、メルヴィルが生まれたときには既に他界していたが、ボストン以上に頻りに訪れたハドソン川上流のこの家(46 North Market Street)で、メルヴィルは、兄や姉とともに、祖父の輝かしい生涯を伝える軍旗や軍服、あるいは戦利品などに囲まれて生活している。ワシントンやジェファーソンと並んで架けられた祖父の威厳に満ちた肖像画の前で、しばしば立ち止ってこれを眺めたこともある。後にメルヴィルは、作品『ピエール』(Pierre, 1852)で、誇り高いこのオールバニーの家をモデルにした作品を世に送ることになる。主人公ピエールは「先祖の貴族的な特質を無数に受け継いだ青年」であり、その先祖は、「革命戦争の時に最重要の砦を数ヶ月間にわたって死守した」(巻一)という輝かしい軍人である。

平和と歓喜、そして誇りに満ちたタヒチ島。これが作家メルヴィルの揺籃期と幼児期の世界のおよその輪郭である。この生い立ちのためであろうか、後の作家

メルヴィルは、平和と歓喜の世界、誇りに満ちた高貴な世界に、強い関心を寄せる。捕鯨船の苛烈な現実の中で、イシュメイルが思いを寄せるタヒチ島は、現実の恐怖とは無関係に存在する「草深い林間の地」(114章)ともされている。イシュメイルによると、この世界には、「魂の中の永遠の春の果てしない風景」が広がり、その風景の中で、人は「朝露にぬれたクローバの畑の若駒のように元気に跳ねまわる」のである。若草の上を元気に跳ね回る若駒の姿には、さながらパストラルの風景の中に生きた幼いメルヴィルの姿が重なる。

死後出版の作品『ビリー・バッド』(*Billy Budd*, 1924)の主人公ビリーは、イシュメイルやピーエルと同様、やはり孤児として設定されている。しかし、この孤児も、単なる一人の孤児ではない。無垢そのものの徴募兵として、艦上の誰からも愛される墮落以前のアダムのようなこの青年は、なるほど「捨て子」であり、「私生児」である。しかし「高貴な血筋」をひく「貴族の末裔」(2章)である。幼年期メルヴィルの心の風景がここにも見て取れる。

### 3 フレンチ・コネクション

1824年、独り旅のメルヴィルが母の実家でひと夏を過ごした年の2年前、メルヴィル5歳の年、マンハッタンの埠頭で、外国から訪れたさる人物の歓迎式が盛大に催される。メルヴィル一家もこの式を眺めた可能性がある。訪れた客は、アメリカ独立戦争とフランス革命の双方において華々しく活躍したフランスの軍人、政治家、ラファイエット侯爵 (*Marquis de La Fayette*, 1757-1834) である。この年、革命50周年を記念して国賓として招待されたラファイエット侯爵は、以後15ヶ月間にわたり、アメリカ各地を旅する。

ラファイエット侯爵のアメリカ訪問は、メルヴィルの家族にとっても、大きな意味を持つものであった。それというのも、この侯爵は、旅の途上で、オールバニーの母の実家(1825年6月15日)と、ボストンの父の実家(同6月17日)を、ともに訪問しているからである。アメリカ独立戦争の際、ジェファーソンの要請に応じてこれに参戦したフランス軍司令官ラファイエットは、メルヴィルの二人の祖父とともに同じ戦争を戦った戦友でもあった。オールバニーで侯爵を迎えた母マリアの兄ピーターは、このとき侯爵が、画家スチュアートが描いた祖父の肖像画をほめたことなどを、ニューヨークのアランに書き送っている。そのアランは、ボストンの祖父を訪ねたこの侯爵に直接会うことはなかったが、実はそれ以前に、フランスのパリでこの侯爵に会っている。

実家へのこの訪問の一ヶ月後、侯爵の歓送会が、先の埠頭に隣接するバッテリー公園 (*Battery Park*) で、再び盛大に催される。熱気球もあがった華やかなこの

会で、連邦下院議員ダニエル・ウェブスター(Daniel Webster, 1782-1852) は、「今のこの時代を改善(improvement) の時代にしようではないか」(Robertson-Lorant 31) と、持ち前の雄弁をふるったという。同じ場所で 10 月には、州知事クリントン(DeWitt Clinton) らを乗せた船が隊列を組む中、エリー運河の開通式が華々しく行われ、通商の活性化への人々の夢をかき立てている。ウェブスターはメルヴィルの祖父の友人であり、また知事クリントンはオールバニーの叔父ピーターと親しい関係にあったが、政治家ウェブスターのことばにも見られるように、この時代は、グローバルな激しい変化の波が、現実の社会や人々の意識の中に大きくうねっていた時代であった。

メルヴィルの父アランとその兄トマス(叔父)は、幼いメルヴィルの身近なところで、この現実と対峙した人であった。若くしてビジネスに携わった父アランは、ボストンの弁護士レミュエル・ショー(Lemuel Shaw, 1781-1861, 後のメルヴィルの妻エリザベスの父)と、オールバニーの弁護士ピーター・ガンセヴォート(母マリアの兄)とともに、オールバニーで不動産関連の仕事に携わっている。しかし、ピーターの妹マリアと結婚したアランは、しばらくオールバニーで生活した後、貿易港としてのニューヨークの将来の発展を見越し、周囲の反対を押し切る形でニューヨークに出ている。1818年、メルヴィルが生まれる前年のことである。

ニューヨークに出る直前、父アランは、ヨーロッパに向かっている。じつはヨーロッパは、アランにとってはすでに体験済みの世界であった。1800年、アラン18歳のとき、大学よりも実社会の体験を重視する祖父の教育方針により、大陸を旅している。18世紀イギリス貴族の間で流行した一種のグランドツアーである。このときアランは、先に渡欧していた兄とともに、パリで2年間、生活をともにしている。今回の渡欧(1818年)は、ビジネスを念頭においたものであったが、久しぶりに旅に出たアランは、リバプール経由でスコットランドの父祖の地を訪ね、その足で旧知のパリに向かっている。そのパリでアランは、ビジネス用物品(中産階級を視野に入れた高級ハンカチ、スカーフ、化粧品など)を契約し、兄トマスの妻(フランス人)の家族に会い、後にアメリカに招待されるラファイエット侯爵とも会っている。

『ホホワイト・ジャケット』(White-Jacket, 1850)でメルヴィルは、フランスかぶれのさる人物(艦長秘書官)を描いている。さながら「ヴェルサイユから派遣された特任大使」(6章)のようなこの秘書官は、金ボタンのシャツを身に着け、ピカピカのうす底靴をはき、象牙製のヘアブラシや真珠貝のクシを使用している。実際の肖像画に見られる父アランの姿は、何やらこの人物を彷彿とさせるところ

がある。フランス風の衣装を身に着け、斜に構えた気取った姿勢で、にこやかに椅子に座っている青年時代(1810年)のアランの肖像は、この秘書官だけでなく、『ピエール』で紹介される主人公ピエールの今は亡き父の肖像画とも重なり合う。ピエールがしばしば立ち止まって眺めたというこの父の肖像画は、批評家ならば次のように解説するものであるという。幼児期のメルヴィルの目に映った父の姿も、これと大差のないものであったろう。

An impromptu portrait of a fine-looking, gay-hearted, youthful gentleman. He is lightly, and, as it were, airily and but grazingly seated in, or rather flittingly tenanted an old-fashioned chair of Malacca. One arm confining his hat and cane is loungingly thrown over the back of the chair, while the fingers of the other hand play with his gold watch-seal and key. The free-templed head is sideways turned, with a peculiarly bright, and care-free, morning expression. (Book 4 Ch. 3)

貿易商となる父アランと対照的に、その兄トマス(叔父)は、フランスから帰国後、農業に従事する。フランス滞在中のトマスは活発に活動している。当時パリに滞在していた後の詩人、政治家、ジョエル・バーロー(Joel Barlow, 1754-1812)は、このトマスの「すぐれた道徳性、立派な才能、堅固な共和国思想」を指摘して、アメリカ領事として任命してはどうかと、ジェファーソンに書き送っている(1802年5月15日 Parker 7)。しかし、フランス人女性を妻として帰国したトマスは、マサチューセッツ州西方、オールバニーとボストンのちょうど中間地帯にあるピッツフィールドにあった祖父の土地に住み、そこで農場経営に従事する。ピッツフィールドは、その後メルヴィルが、夏の休暇の時期など、しばしば訪問し、滞在することになる場所である。しかも、後にメルヴィルは、この地(Arrowhead)に居を構え(1850年)、しばし創作活動に勤しむことになる。

幼児期のメルヴィルに取って、叔父トマスのこの農場は、大きな楽しみのある場であった。親戚の子どもたちとの交わり、農場での遊び、叔父トマスの炉辺の談話など、さながらパストラルの世界であった。農場で働く叔父の姿も、幼いメルヴィルに強い印象を残すものであった。後にメルヴィルは、このころ農場で眺めた叔父の姿を次のように回想している。草刈り作業の後、農具に身を寄せ、ゆっくりと嗅ぎタバコを手にする叔父の姿には、ヴェルサイユから遠くはなれた田舎で生きる落魄貴族のような、淡いオーラが漂っていた。

At the end of a swath, he would at times pause in the sun, and taking out his smooth-worn box of satin wood, gracefully help himself to a pinch of snuff, partly leaning on the slanted rake, and making some little remark, quite naturally, and yet with a look which—as I now recall it—presents him in the shadowy aspect of a courtier of Louis XVI, reduced as a refugee, to humble employment, in a region far from the gilded Versailles. (Parker 86)

パリ時代に有能さを買われたこの叔父は、田舎でも名士となる。農場主として新時代への対応を声高に主張し、地産地消の農場経営も唱える。しかし、実際の経営はうまくはいかず、土地の購入を巡る負債も重なり、結果として投獄の憂き目にも遭う。その後、追われるように西の世界に向かった叔父は、その地（イリノイ州ガリーナ）で、貧窮のうちに生涯を閉じる。まさに「落魄貴族」の生涯である。しかし、フランス帰りの叔父が経営したこの農場は、幼いメルヴィールにとっては、間違いなくイシュメールがあこがれたような「草深い林間の地」であった。

#### 4 ガラスの船

メルヴィールの第三作『レッドバーン』(Redburn, 1848) は、幼いころの思い出の「ぼんやりとした回想」(1章) から始まる。父と一緒に埠頭に立って、出入りする船を眺めたこと、冬の夜にその父が炉辺で、兄と自分に、嵐の海の航海やフランスやイギリスの話をしてくれたこと、そしてまた、居間の隅のオランダ製テーブルの上に、ガラスケースに入れられた「ガラスの船」—「30年ほど前に父が大叔父への贈り物としてハンブルグから持ち帰った長さ約 18 インチほどの昔風のフランス製のガラスの船」—があったこと、などである。

『レッドバーン』は、フィクションとして書かれている。しかし、個人的色彩がきわめて濃い。作品の素材はかなりの部分が事実に基づいている。海辺の散歩、炉辺での談話、荒海での航海や大陸の話—これらはメルヴィールが、幼い時期に現実に体験したことであるだけでなく、調度品としての「ガラスの船」は、実はボストンの祖父の家に、実際に置かれていたものである。祖父の家を訪れた幼いメルヴィールが、このガラスの船の調度品に目を輝かせていたことは、隣人の証言にも残されている。

『レッドバーン』の主人公 (Wellingborough Redburn) は、これらの思い出に誘われるように海に出る。商船に乗り、リバプールに向かい、帰国する。この行動は、後のメルヴィールの行動とそのまま重なるが、主人公が海に出た最大の要因は、

「幼い頃 (early childhood) に港町の住人として体験した埠頭や倉庫や船」(1章)の思い出である。これが、「海に出る運命」という自分の「漠然とした予言的な思い」を育てている。ただしこれは、主人公レッドパーンの場合である。現実のメルヴィルの場合、このような思い出のほかにも、さらにいくつか、その要因を探ることも可能だろう。たとえばメルヴィルが、幼い頃から身近に接してきた何人かの親戚の存在である。

幼い頃メルヴィルは、兄や姉とともに、とりわけ夏の間はほぼ毎年、親戚の家に送り出されている。定番は父や母の実家である。しかしメルヴィルの場合、このほかにとりわけ滞在を楽しんだ家がある。ロードアイランドのプリストルにある叔父ド・ウルフ (John D'Wolf, 1779-1872、父アランの姉メアリの夫) の家である。船長経験者であるこの叔父は、メルヴィルの誕生のときに立ち会ってくれた親戚の一人でもあったが、また幼いメルヴィルを、ニューヨーク港入り口近くのトムキンス砦 (Fort Tompkins) まで、船で連れ出してくれたこともある人である。また父の亡き後、メルヴィル家の財産管理にも手を貸してくれた親戚である。ところが、幼いメルヴィルが接したこの叔父は、ただの船長経験者ではなかった。ロシアの著名な博物学者ランドルフ (G.H. von Langsdorff, 1774-1852) と、シベリア横断の旅 (1807年) をした経歴を持つ輝かしい叔父であった。この旅のことは、ランドルフの著書 (*Voyages and Travels in Various Parts of the Worlds*, 1813) で報告されているが、叔父自身も、この時の体験を後日出版している (*A Voyage to the North Pacific And A Journey Through Siberia*, 1861)。

1828年夏、9歳のメルヴィルは、ナラガンセット湾を望むこの叔父の家で、楽しい一夏を過ごす。叔父の息子のランドルフ (叔父は息子にシベリア体験の同行者の名前をつけた) とともに、メルヴィルは、まだ幼いながら、叔父の体験に耳を傾けたり、従兄弟と同名の博物学者の著書をめくったりしたに違いない。後にメルヴィルは、『白鯨』のなかで、この叔父のことを、語り手イシュメイルを介して紹介する。「宣誓供述書」の章で鯨との遭遇について語るイシュメイルは、関連して博物学者ランドルフの航海記に触れ、その航海記で立派な船長として言及されているニューイングランド人船長ド・ウルフについて、「じつは自分はその船長の甥であるという光栄に浴している」(45章)と解説している。まだ存命中の叔父を、メルヴィルは、実名で紹介しているのである。幼くして接したこの叔父への深い思いが見て取れる。

未開の島の体験者、という点で注目したい親戚もいる。ピッツフィールドの叔父トマスには、フランス滞在中に生まれた息子トマス (Thomas Wilson Melvill, 1806-1844) がいる。メルヴィルの従兄弟にあたるこのトマスは、幼い頃のメルヴ

イル兄弟の憧れの的であった。年齢的に10歳以上年上であったが、この従兄弟は、アメリカ海軍の軍艦 (*U.S. Vincennes*) で世界の海を航海していた。1827年6月、メルヴィル8歳のときには、ペルーのカラオから、「太平洋の島々の中を航海し、来年5月には、喜望峰、広東、マニラ、セントヘレナ島を経て帰国します」(Parker 75) という手紙が送られてきている。この手紙を父アランは、息子たちに読んで聞かせている。軍艦生活の中でトマスは、自分に対していわれのない悪態をついた仲間に向かって殴りかかり、処罰を受けたこともあったという。さながら『ペリー・バッド』の無垢の青年ペリーが、悪の固まりのような上官の挑発に対して殴りかかったような行為である。メルヴィルの脳裏には、この従兄弟の体験があったに違いないが、幼いメルヴィルにとっては、この従兄弟の存在も、さながら「ガラスの船」のようなものであったのだろう。

艦船でのトマスの航海の様子は、船上牧師スチュアート (Charles S. Stewart) の著書 (*A Visit to the South Seas, in the U.S. Ship Vincennes*, 1831) に記されている。叔父トマス (従兄弟トマスの父) は、息子の乗った艦船のことが記されたこの本を、ピッツフィールドの自宅に置いていたという。この本には、艦船のマルケサス諸島訪問のことも記されていたが、ピッツフィールドをしばしば訪ねていたメルヴィル兄弟は、この本をめくる前に、すでにトマスが1829年7月にマルケサス諸島スクヒバ島のタイビーの谷を訪れていたことを知っていたという。タイビーの谷は、後にメルヴィルが、捕鯨船を捨てて逃げ込んだ場所として、処女作『タイビー』 (*Typee*, 1846) で小説化するところである。この意味でトマスは、作家メルヴィルの太平洋体験の身近な先輩であったことになる。

母方の親戚にも、メルヴィルが生涯にわたって大きな関心を寄せた従兄弟がいる。母マリアは6人兄弟 (姉妹) の末子であったが、オールバニーの実家を継いだのは、すぐ上の兄ピーターであった。その上の兄レオナルド (Leonard) は、1821年に亡くなるが、孤児として残されたその子の一人に、次男のガート (Guert Gansevoort, 1812-1868) がいる。メルヴィルよりも7歳年長である。この従兄弟もまた海に出た。1824年、メルヴィル5歳のとき、マンハッタンのメルヴィルの家に立ち寄ったガートは、そこから海軍のフリゲート艦 (*USS Constitution*) に乗り込んでいる。このときガートは、まだ12歳の孤児であった。

ところが、若くして海軍軍人となったこの従兄弟が、やがてアメリカ社会を震撼させる一大事件の当事者となる。ソマーズ号事件 (Somers Affair) である。1842年11月、西インド諸島に向かっていたアメリカ海軍帆船ソマーズ号で、謀反事件が勃発する。11月25日、夜間にひそかに謀反が共謀されたとの情報が、艦長マッケンジー (Captain Mackenzie) に伝えられ、ただちに容疑者として、三名が捕縛

される。首謀者とされる海軍士官候補生スペンサー (Phillip Spencer) と、その共謀者二名である。スペンサーは、当時の国防長官 (John C. Spencer) の息子であった。艦長の指示のもと、関連情報の確認と調査、容疑者の取り調べが行われ、12月1日、3人の絞首刑の判断が下され、当日ただちに刑が執行される。これがこの事件の、およその輪郭である。ところが、謀反の情報を受け、それを任務として艦長に伝えたのは、同じく海軍士官候補生であった従兄弟のガートであった。

ソマーズ号の帰港後、衆目監視の中で、処刑の判断の妥当性を巡って、軍法会議が開かれる。艦長も、ガートも、関係者として、これに召喚され、尋問される。結果として、関係者が罪を問われることはなかったが、軍艦上で起きたこの事件は、処刑か殺人かをめぐり、後々まで尾を引く大きな事件となる。今日に至るまで、アメリカ海軍で起きた謀反事件は、この一件だけであるという。

遺作となったメルヴィル最晩年の作品『ピリー・バッド』が、この事件を素材としていることは周知である。絞首刑に処されるピリーの姿には、ソマーズ号の3人の姿が重なるし、判断の難しい軍法会議に臨むヴィア艦長の姿には、苦しい判断を迫られるマッケンジー艦長の姿も重なる。同時に、謀反の情報を伝達する立場の若い士官としてのガートの苦悩する姿も重なる。若くして海に出た従兄弟ガートの生涯は、身内の人間であるメルヴィルにとって、文字通り、生涯にわたる関心事であった。

## 5 コレラの夏

1819年8月13日、生まれたばかりのメルヴィル (8月1日誕生) は、母に抱かれ、兄、姉とともに、オールパニーの母の実家に向かう。この夏、ニューヨークは騒然としている。米英戦争 (1812-14) 終結後の混乱が未だ収束していない中、チフスや黄熱病、アジアコレラが、貧民街を中心に蔓延し、郊外のポターズ・フィールド (Potter's Field, 現 Washington Square) では、放火事件の容疑者として黒人女性の絞首刑も執行されていた。疫病感染を恐れて街を離れるものも少なくなかったが、メルヴィルの父アランは「逃げ出す者は子犬を狂犬と思っているだけ」(Robertson-Lorant 20) ということばを口にしていたという。しかし、妻子を避難させるというごく一般的な家長としての役割を、やはり果たさずにはいられなかった。

疫病はしばしば周期的に発生する。中でもコレラは、周期性が高い。コレラ発生の記録は紀元前に遡るが、世界的大流行 (パンデミック) は、1817年に始まる。それ以来、1884年にコッホによってコレラ菌が発見され、防疫体制が確立されるまで、何度かの周期的発生が記録されている。メルヴィルの家族が母子そろって

実家に避難したのは、ニューヨークがこの最初のパンデミックの恐怖に襲われていたときであった。

このときから13年後、1832年6月、北米大陸を再びコレラの恐怖が襲う。このときメルヴィル一家は、父を除いて全員が、オールバニーに住んでいる。このオールバニーで、カナダでのコレラ発生の第一報が伝えられ、さらに、感染の酷さや犠牲者の多さ、そして、オールバニーの住民を感染から守るべきエリー運河の検疫体制が十分に機能していないこと、さらに、川下のニューヨークは既にコレラに襲われていること、などが次々と伝えられると、市民は一気に恐怖に駆られる。母マリアも例外ではなかった。7月14日、8人の子供とともに、13年前にニューヨークから避難したのと同じように、オールバニーを後にする。避難先は、母がそれまで一度も訪ねたことのないピッツフィールドのトマス叔父の農場であった。この夏、オールバニーでは、犠牲者が400名に上ったという。

8人の子を抱え、乗合馬車でピッツフィールドに向かうこのときの、母の心を押し量るのは容易である。オランダ改革派カルヴィン主義の流れを汲む信仰心の厚かった母マリアは、個人的感情を極力抑制する姿勢で日々を送っていた。しかし、夫であるアランを、じつは、つい半年前、この年の冬、オールバニーで亡くしているのである。しかも、夫アランの最期の姿は、見る者が目を覆いたくなるような、悲惨なものであった。死の直前の1831年の暮れ、負債の処理に追い立てられたアランは、一年前にすでに後にしていたニューヨークに、再び一人で向かい、借金の返済に奔走する。その帰路、凍結のため船が動かなくなったハドソン川を、夜間の風雪の中、徒歩でわたり、家族の待つ家に、疲労困憊してなんとか辿り着くことはできた。しかし、この直後、病の床に伏すことになり、翌1832年1月28日、さながら狂人のようにうわごとを口走りつつ、息を引き取っている。享年49歳、メルヴィル12歳のときである。

貿易商としてのアランの仕事は、当初順調に進んでいる。マンハッタンを北上して重ねた転居は、その反映である。しかし、その後の度重なる負債により、1830年頃には、仕事の継続自体が困難な状況に陥ってしまう。苦しい状況の中、アランは、メルヴィルを除く7人の子供たちと妻を、オールバニーの妻の実家に送り出し、家財処理などを済ませた後、後を追うように、1830年10月8日、息子メルヴィルと二人で、嵐で出発の遅れた船に乗り込み、オールバニーに向かう。さながら、息子と連れ立った敗残ビジネスマンの、夜逃げの旅である。後に『白鯨』でメルヴィルは、神からの逃亡を図って、タルシシ向けの船に人目を避けて乗り込み、暗い船室で不安な夜を過ごす逃亡者ヨナの話(9章)を提示している。マンハッタンの埠頭から船に乗り込み、嵐の夜にオールバニーに向かう父子二人の

姿は、このヨナの話の思い出させる。

オールバニーは、新婚の頃アランが、一時期生活した町である。その後も妻の実家の場所として、家族ぐるみで親しんでいた場所である。ニューヨークを目指して一度は後にしたこの町を、ニューヨークから逃げ帰ったアランは再び生活の場とする。やむを得ない転居であったが、この時期のオールバニーは、以前にも増して活況を呈していた。1817年に工事が始まったエリー運河は、1825年には開通式を迎え、これによって、オールバニーとバッファローを結ぶ交通手段が確保され、大西洋、ニューヨーク、ハドソン川、オールバニー、エリー運河、バッファロー、五大湖、という長大な流通経路が完成している。オールバニーは、この流通の要にある町であった。後にニューヨークの億万長者となるアスター財閥のジョン・ジェイコブ・アスター (John Jacob Astor, 1763-1848) なども、この時期、この地で、毛皮貿易や不動産取引など、活発なビジネス活動を展開している。

アランの失敗の原因は、第一に、ビジネスマンとしての才覚にあったかもしれない。ボストンやオールバニーの実家への度重なる資金援助の申し込みなどは、その現れであろう。しかし、激しく変化しつつあったアメリカ社会の犠牲者であった点も否めない。米英戦争で著しく疲弊したアメリカ社会は、立ち直る過程で次第に「競り」を中心とする新しい市場経済へと移行しつつあった。20年代は、その影響が顕著になりつつあった時期であったが、結果として1837年には、社会全体が一大恐慌に襲われることになる。旧来の取り引きに左右され、「競り」への対応が遅れたとされるアランは、名家の子息として、やや甘やかされてきたことになるのかもしれない。

フランス人トクヴィル(Alexis de Tocqueville, 1805-59) は、『アメリカの民主主義』(*Democracy in America*, 1835) で、この時期のアメリカ社会を観察している。それによると、アメリカ人の特質は、次のようなものである。「あらゆるものに手を出す、しっかり握りしめることなく、すぐに失ってしまうアメリカ人」一さしずつめメルヴィルの父アランは、このようなアメリカ人の典型であったかもしれない。

Americans cleave to the things of this world as if assured that they will never die,  
and yet are in such a rush to snatch any that come within their reach, as if expecting  
to stop living before they have relished them. They clutch everything but hold  
nothing fast, and so lose their grip as they hurry after some new delight.

(Robertson-Lorant 12)

コレラを避けてピッツフィールドに避難したメルヴィルは、すぐに一人でオールバニーに戻る。叔父ピーター（母の兄）から、呼び出しの手紙が届いたからである。このときメルヴィルは13歳であるが、叔父のすすめもあって、すでにオールバニーの銀行に働きに出ている。祖父が設立に関わった銀行である。ピッツフィールドの農場は、幼い頃からメルヴィルの大好きな場所であったが、二年前に父をなくした孤児として、馬車で仕事に戻る13歳の少年の胸中は、どのようなものであったらうか。

ピッツフィールドに避難したメルヴィル一家は、続いてボストンの父の実家に向かう。そこでしばらく滞在した後、コレラの収束を見計らって、再びオールバニーに戻る。ところが、オールバニーに戻った直後、今度はボストンから、悲報が届く。祖父トマス死去の知らせである。メルヴィルに取ってこの祖父は、連れ立ってともに港や戦跡を散策した、懐かしく、優しい、誇り高い祖父であった。

父の死、コレラ騒ぎ、そして祖父の死去。『レッドバーン』のことは、そのまま13歳の孤児、メルヴィルのことばでもあろう。「頑健な大人となるまで残しておいてほしい心の痛みを、幼いときに味わわされてしまうことほど、つらくて、残酷なことはない」（2章）。

## 6 むすび

メルヴィルとニューヨークの関係は深い。マンハッタンのウエストサイドに「ガンセヴォート・ストリート」(Gansevoort Street) という名称の通りがある。西13番街と交差するところである。現在は肉の包装工場などが散在する比較的目立たない普通の通りであるが、名称に見られる通り、この通りは、メルヴィルと関係がある。

メルヴィルは晩年、ボストン税関 (Boston Custom House) に勤めた祖父トマスと同じように、あるいはセイレム税関 (Salem Custom House) に勤めた先輩作家ホーゾンと同じように、ニューヨークの税関に勤務する。この税関 (New York Custom House) は、米英戦争 (1812年) のときに造営された砦の跡地に建てられたものであった。ところがその砦の名称として使われたのは、独立戦争時にスタンウィックス砦で勇敢に戦った名将ガンセヴォート(メルヴィルの祖父) の名前であった。その名前が、この地区の通りの名称として、現在も残されているのである。メルヴィルは晩年、この名称の由来について、通行人にさりげなく聞いてみたこともあったという。

短編『ジミー・ローズ』("Jimmy Rose," 1855) は、19世紀中頃のニューヨークが舞台である。この時期のマンハッタンに生きた老人の物語である。若い頃、輸

入品で飾られた豪華な家に住み、華やかな社交の世界に生きながら、手がけたビジネスの失敗で、一夜にして財を失い、人間嫌いとなって、乞食同然の生活へと陥った一人の老人の物語である。チーズやバターやソフトワッフルの生活から、施しの生活へと暗転した老人の物語である。この老人のかつての家に、たまたま住むことになった語り手は、老人の人生の暗転とともに、ニューヨークの街の過去と現在の激しい落差について思いめぐらす。富裕層の住む高級住宅地であった目の前の場所は、今では、倉庫や工場の並ぶ街となっている。

1830年の父アランの破産と、1832年のその父の死を契機に、メルヴィル一家の生活も暗転する。父亡き後、母マリアと8人の子は、借家住まいを余儀なくされ、1838年には、オールバニー北方約15キロ、ハドソン川東岸の小さな町ランシンバーグ (Lansingburgh, 現 Troy) への転居も強いられる。この転居は、貿易の仕事を始めた長兄ガンセヴォートが、1837年の恐慌と工場の火災という不慮の事故により、倒産に追い込まれたからである。母子家庭9人が生きていくためには、住み慣れたオールバニーよりも一段と家賃の低い新たな住居を探さなければならなかった。

生活の暗転は、メルヴィルが、ちょうど幼児期、児童期を脱し、少年期に向かい始めた頃である。この頃からメルヴィルは、社会的に多様な経験を重ねる。13歳での銀行勤めは、その端緒であった。この後、兄ガンセヴォートの仕事が窮地に陥ると、銀行を辞めて兄を手伝い、そのかわり、オールバニーの学校 (Albany Classical School) に通い、青年会 (Albany Young Men's Association for Mutual Improvement) に入会し、サークル活動 (Philo Logos Society) に従事する。一方で、若者向けの地元の新聞への投稿も始める。ランシンバーグ転居後も、活発な活動は変わらない。青年会活動、サークル活動を継続し、その委員長にも選ばれ、地元の学校 (Lansingburgh Academy) で測量学の勉強も始める。運河と開拓の時代の有効な資格の取得のためである。そしてさらに、この活動のかたわら、後の作家メルヴィルの誕生につながるような活動にも手を染める。短編作品 ("Fragments from a Writing Desk") を地元の新聞 (Democratic Press and Lansingburgh Advertiser) に投稿し、これが採用され、さらに別の新聞にも転載されることになる。

『白鯨』冒頭 (1章) で、イシュメイルは、海に出る自分の動機について語る。それによると、海に出るのは、「財布」が空になり、「陸上生活」に興味を持たず、「憂鬱の気」に支配されてしまったからである。そして、海に出るこの行為は、ローマの哲人カトーとも無関係ではないともいう。哲人カトーは、美辞麗句を口にして剣に身を投げたが、自分は「短銃と弾丸の代用物」として海に出るのである。すなわち、イシュメイルにとって、海に出ることは、「自殺」を避けるための

一つの方策なのである。

1839年6月、父の死後7年目の夏、19歳のメルヴィルは、ハドソン川を下り、商船に乗り込み、リバプールへ向かう。これを見送った母マリアは、そのときの気持ちを、この時ニューヨークにいた息子ガンセヴォートに書き送っている。

“Herman is happy but I think at heart he is rather agitated.... I can hardly believe it & cannot realize the truth of his going.”  
(Delbanco 27)

母マリアと同様、このときのメルヴィルの心の風景は、知るべくもない。しかし、心の奥の風景のぼんやりとした輪郭には、おそらく、揺籃期、幼児期にメルヴィルが、ニューヨークやボストン、オールバニーやピッツフィールドで刻んだ様々な風景が、複雑に混じりあっていたことであろう。

### Sources

Hayford, Harrison, et al. eds. *The Writings of Herman Melville*. 15 vols. Evanston and Chicago: Northwestern Univ. Press and the Newberry Library.

Arvin, Newton. *Herman Melville*. Westport: Greenwood Press, Publishers, 1972

Delbanco, Andrew. *Melville: His World and Work*. New York: Vintage Books, 2006.

Hardwick, Elizabeth. *Herman Melville*. New York: A Lipper/ Viking Book. 2000.

Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography*. Volume 1, 1819–1851. Baltimore: Johns Hopkins Univ. Press, 1996.

Laurie, Robertson–Lorant. *Melville: A Biography*. New York: Clarkson Potter, Publishers, 1996,

(岩手大学名誉教授)